

蘆の葉釣

泉鏡花作

全一章

汐魚や海津の随分釣れるのが、また其の日に限つて一尾もかゝらなかつた、と云ふと大分仔細らしく事ありげに聞えますが、私の釣れないのは平常の事で、何うかして夕ボ汐魚ぐらゐの食ひつく方が、不思議と云つていゝのですから、別にさしたる事件ぢやないので。當日も例に因つて、朝から些とも釣れなかつた。處が、正午頃、秋日和でも赫と暑いから裏田圃の川べりの、茄子畠の垣にからめた、藤豆の葉がくれで、一流蘆の葉釣と稱へるのを小半時行つて、鰻を一尾して遣りましたよ。

此の蘆の葉釣と申すのは、其の天然を樂しむ點に於ては、恐らく太公望以上なもので、あのすつくり生えた蘆の一節をかけて、葉へ缺んで、釣棹を斜にもたせて、絲を思ふ状、ドボンと、それ向うへ投げます。おもりの重みで、好な處へする／＼と來て、

糸がすつと留まる。さら／＼と風が吹いて渡るに従つて、ゆら／＼可い加減に蘆があしらつて釣つてくれる。當人は、うら枯へ足を投げて、銜煙管で脂下ると云つた寸法で、こゝぞ、とも何とも思はず、ウキの機かけもなし引上げる。

え？　それで、うまく釣れるかつて？　串戯をおつしやい。大概餌を取られるんです。それでも一心不亂に棹を撓めて居て、コツリと當るか、グツと引く、氣のぼりがして、ヤツと上げると、渡蟹が、のつしと顯れるよりは増ですからね。

渡蟹と云つて、もぢや／＼と毛の生えた、剣道者が小手を嵌めたやうな手のある奴。水の底をゆさ／＼と横行する大將で、又澤山居る。其處此處、橋の下、蘆の淀み堤防の淵など、云ふ切所々々には、凡そ、ぬしとも思ふ奴が住居をなして、岡釣徒には難場としてある。汐魚など釣はずか、海津など畚から跳ねるか、手負び、落武者の、よろ／＼と淺瀬に漂ふのを、蔭から見透してのそりと出て引鉄む、野武士と言つても可いのです。これが、釣手甘しと見

ると、其のコツリグイを遣つて、占めたと、先づ大
歡菩をさせる。處で引上げる絲に連れて片手で餌
を引搦んで斜に構へながら、正面へ頭を切つて仰向
け状の大見得でせり上る。ずばりと出て、水を離れ
る時、些と大儀だいと言ふ氣取りで、手を代へて餌
を一つ挟み直して乗上る處が、遺恨骨髓に徹します
な。

「畜生」

か何かで、横しよ引きに塵棄場などへ取らうとす
ると、憑物が離れたやうに、フィと、棹が軽くなる、
はずみをくつて、どさりと尻餅。ホイと云ふ時分に、
ぽちやんと水音が立つて、即ち水中へ御潜入。

何と堪へられますまい。其處で、はあ／＼大息で
釣つてるより、蘆に釣らして見物が可いと悟つた。
これでもし魚の方が馬鹿にすれば、蘆の葉が、さか
立つて、莖がしやんとなつて水を睨む、ト秋らしい
影が映つて、風情も多い。

さて、其の日も件の蘆の葉のしやんと極つた風凧
ぎのトタンに、ひよいと上げると、手應へがして、
虚空へ白く翻つたものがある。海津はキラ／＼と曇
る、鯨はどんよりと照る、枯蘆に赤い日が射す、枝
豆に白い風が吹く、と云つた水切れの工合なのが、
恰も炎天の眩きに、燐火のやうな色でせう。

棹を反らしたまゝ、あつと見て居ると、背後の茄
子畠から、頬被の影がさして、お百姓が、眩い顔色、
目皺を刻み、大口あいて、

「釣つた、釣つた、大い鰻だよ。」

と云つたがい秋茄子ぐらゐな逸物。鉤をはづすと、
や、膨れたの侯の、唯もうプツと成つて眼を睜る。
汐が其の時さつ／＼と上げて居ました。

すぐにぐつたりとしたから、餘程接吻をして見た
かつたが、古書の誠戒に鑑みて、吹かずに
泳がせました。又

【完】